



<漫筆漫歩> つくば市を「呼び寄せ高齢者が自立できる街」に

著者	右田 玲子
雑誌名	筑波フォーラム
号	59
ページ	4-6
発行年	2001-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/8409

つくば市を 「呼び寄せ高齢者が自立できる街」に

右田玲子
医学研究科

スライドを作るために竹園の写真屋に寄り、6車線の道路を前にしたベンチで、「筑波大学中央行き」のバスを待った。小春日和の太陽の暖かさが伝わり、木の葉を通りすぎる風の音が心地よい昼下がりだった。バスを待つ70代の女性に話しかけた。「つくばには、いつ頃から住んでいらっしゃるのですか」彼女の話によれば、5年前に、自分の健康、特に足腰が弱くなって1人暮らしに見切りをつけ息子のいるつくば行きを決心し、札幌を後にしたということだった。「札幌での生活と一番異なることは何ですか」の私の問いに彼女は即座に「交通の便です」と答えた。札幌では、流しのタクシーが足がわりで、時間のロスもなく目的を果たすことができたそうである。「きょうは、お買い物ですか」との私の問いに、「友人とセンターで待ち合わせておしゃべりをする予定です」と答え、「でも、友人は松代に住んでいるため、バスの時間を気にしながらお

話しなければならないのが残念です」と言われた。昼から夕方までのバスは、1時間に1本ぐらいしかないので、バスの時間によって行動が制限されると訴えられた。

彼女の松代の友人は、つくばに引越してきて間もない頃、東京でのお通夜の帰り、土浦で最終バスに乗り遅れたことがあるという。駅のタクシーは出払っていたので、歩いていれば途中でタクシーを拾えるだろうと歩き出し、センターまで歩いたという経験の持ち主だそう。歩きながら、「満州からの引揚げの時のことを思えば、これくらいは何のことはない」と唱えながらセンターまでの孤独な道のりを耐えたということだった。車で移動することがあたり前と考える住民の住むつくばの街に、交通の便利な大都市から引越してきた高齢者が遭遇した極端な例である。私は、ふだんの生活ではバスを利用することが多い。車でつくば

市内を動くことに比べ、本数の少ないバス利用の場合は、目的を果たすための周回な計画の必要性を余儀なくされる。その70代の女性は、計画的に行動せざるをえない状況により生活のなかで歩く機会が多くなり、足腰が鍛えられたという。死期が近づいたと思い引っ越して来たが、かなり元気に過ごすことができ、もう5年も生きてしまったと笑顔で言われた。

「つくばに来てよかったですか」の問いに、「元氣になれたことはよかったけれども、これから先のことを考えるといろいろ心配です」と答えられた。70代の女性とセンターで別れた後、呼び寄せ老人が来たいと思う街について考えてみた。

＜つくばの魅力＞

歴史が浅いつくばでは、歴史めぐりなどの散策は期待できないし、住宅周辺の散歩で刺激を得ることは都会と比べて難しい。誇れるものは、緑と小鳥、風のささやきであろうか。いたるところに公園があり、車と分離された四季を感じることができる緑地帯があり、歩行空間としてのベデストリアンデッキが南北10km以上も続く。

＜つくばの魅力を満喫しつつ身体機能の低下を防ぐ＞

つくばは、高齢者が散策を通して四季を

楽しみ、身体機能の低下を予防できる可能性は高い。しかし、そのためには、身体に不調を感じたり、急に天候が変わった場合に、バスやタクシーなどの交通手段を利用できることが必要となる。高齢者が安心して散策を楽しむことができる環境をつくるためには、タクシーを呼べる、または、バスのその時点の運行状況がわかるための、高齢者にやさしい情報機器と交通手段の整備が必須であろう。

＜高齢者呼び寄せのきっかけ＞

1993年の東京都町田市の呼び寄せ高齢者の調査によれば、呼び寄せのきっかけ（複数回答）は、1位「息子（娘）が誘ってくれた」（56.7%）、2位「老後の生活に不安を感じた」（36.5%）、3位「以前から親族と同居したいと思っていた」（27.9%）で4位以下を大きく引き離していた。ちなみに、4位「福祉サービスの充実」（10.9%）、5位「医療サービスの充実」（7.1%）と続いていた。呼び寄せ高齢者を含む町田市への転入高齢者全体と比較しても1位から5位までの順位は、変わらなかった。1993年の時点では、呼び寄せ高齢者の50%以上は、息子（娘）が誘ってくれたことを理由としてあげていることになる。この場合、息子（娘）家族の居住地と転居してきた高齢者居住地

との距離は、町田市内ではあるが様々であると思われる。

これがつくば市内である場合はどうかと考えてみると、商店、医療施設、銀行、役所、郵便局などへの日常生活に伴う外出のすべての自立は、都会に比べて現在の状況では難しい。そして、さらに、身体機能の低下に伴い難しくなることが予想される。現在の時点では、高齢者を呼び寄せても、日常生活に関わるかなりの部分を支援する覚悟が必要である。

<QOLの高い生活への期待>

交通の便に対する対策としては、自治体によるタクシー券の発行や、自治体や民間、住民による低床バスなど高齢者に配慮したミニバス便などを含めたバスの運行を推進することがあげられる。また、それを含めた高齢者にやさしい街づくりの取り組みが重要課題である。

さらに、外出の介助が他の自治体に比較して、若年層が多いことから得やすいという期待がある。定額で契約できるインターネットを利用し、画面の検索でコーディネートできるシステムをつくり、介助者が得やすい環境を作りあげることが可能と思われる。

また、家においても、インターネットを

駆使し、画面上で学生の街つくばならではの学生と高齢者との交流システム、たとえば、呼び寄せ高齢者の故郷の郷愁を誘う方言による話相手などにも発展できるとと思われる。そして、新しい街つくばだからできる福祉サービスとして、自治体で認められることが必要となる。

<高齢者向け住宅の建設への期待>

高齢者を呼び寄せるための住宅や居住環境の条件は、電車やバスなど交通機関の駅に近く、外出意欲が持てる環境で、毎日の日常の買い物、病院、銀行・役所・郵便局などに便利に行くことができることがあげられる。

また、高齢者の住宅内部は、将来、自宅で過ごすことが長いことが予想されることから、日照・通風・騒音などの環境条件への配慮が必要であること、建物がバリアフリーであること、緊急通報が備えられていることが必要条件であろう。

今後、常磐新線の開通に伴い、新駅を中心に街づくりがすすめられることが予想される。駅周辺に高齢者にも配慮された「呼び寄せ高齢者」も魅力を感じるような様々なかたちの高齢者住宅が推進されることを期待したい。

(みぎたれいこ)